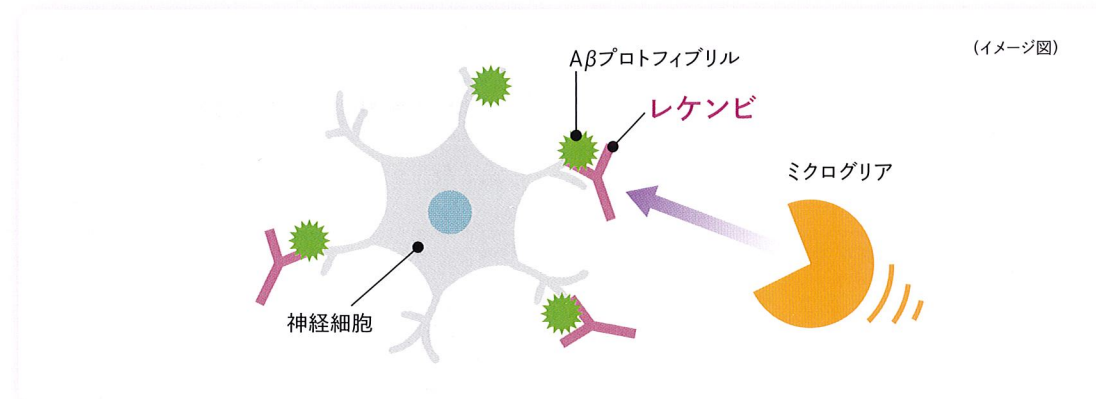


レケンビってどんな薬ですか？

レケンビは、「アルツハイマー病による軽度認知障害 (MCI)」と「アルツハイマー病による軽度の認知症」に対する薬です。主としてAβプロトフィブリルに作用します。

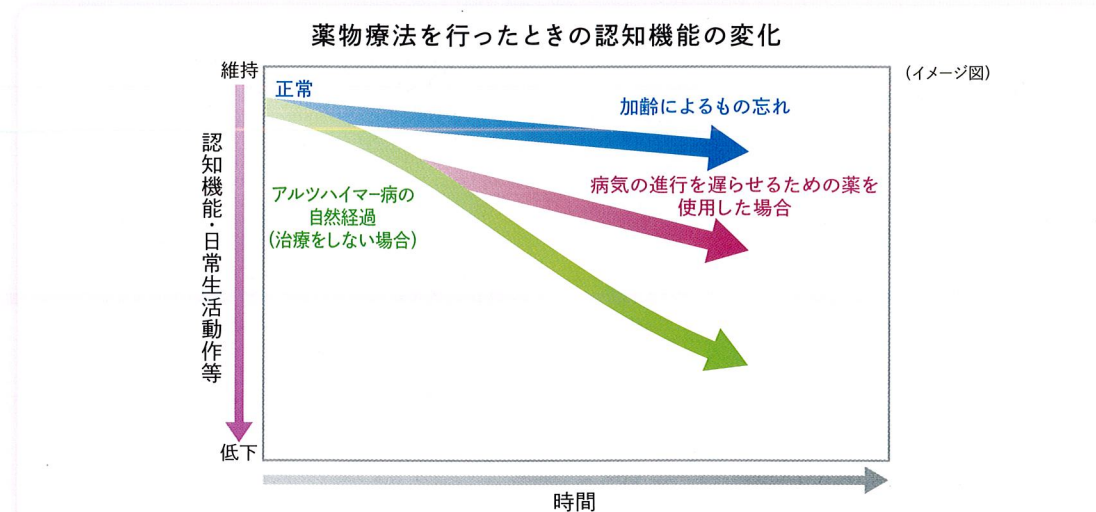
Aβプロトフィブリルは、Aβがかたまりになる途中の物質で、レケンビがAβプロトフィブリルにくっつくことで、異物を排除する細胞のミクログリアを引き寄せ、Aβを取り除きます。その結果、脳のAβが減り、アルツハイマー病の進行が遅くなることが期待されています。



アルツハイマー病の薬には、今出ている症状を緩和するための薬と、病気の進行を遅らせるための薬があります^{2,3)}。

レケンビは、病気の進行を遅らせるための薬で、認知機能の低下をゆるやかにすることが期待されています。

2) 朝田隆: 臨床精神薬理 2023; 26(2): 141-148 3) Cummings j: Drugs 2023; 83(7): 569-576

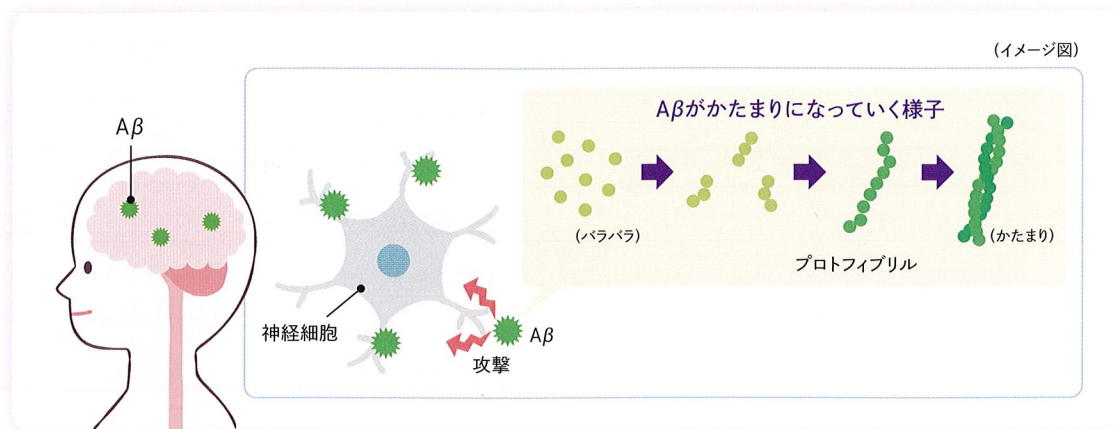


Hefti F. DRUG DISCOVERY for NERVOUS SYSTEM DISEASES. WILEY 2005, p.178より岩田淳先生(東京都健康長寿医療センター 副院長・脳神経内科部長)が作成

アルツハイマー病とは？

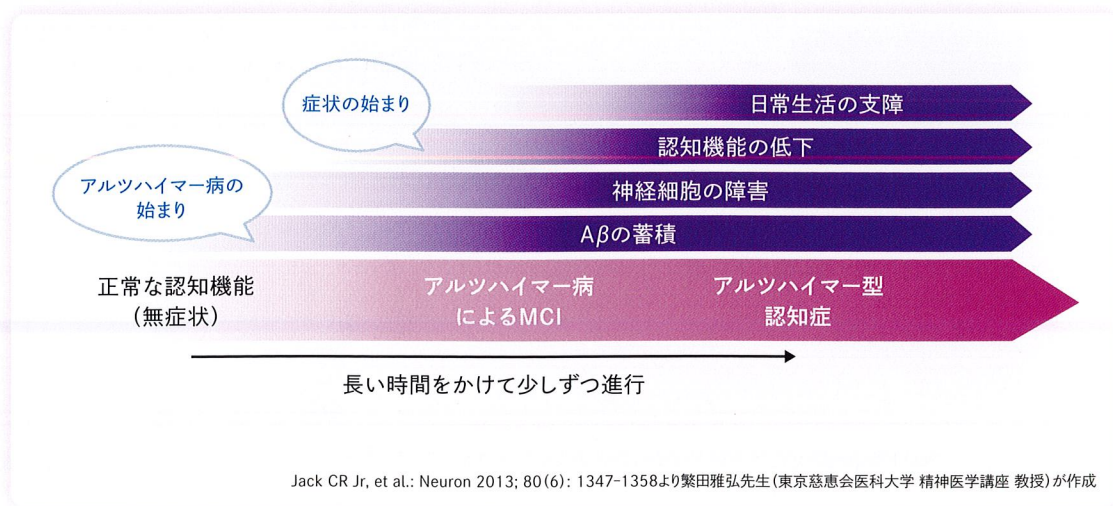
アルツハイマー病は、脳におけるアミロイドβ (Aβ) と呼ばれる蛋白質の異常が病気を引き起こすと考えられています。

正常な状態では、Aβは産生されてもバラバラのまま脳から取り除かれますが、アルツハイマー病の人ではかたまりを作って脳の中にたまります。このかたまりが神経細胞を障害することで、神経細胞の働きが落ち、数が減って、脳の萎縮が進むと考えられています。



また、脳の中にはタウという蛋白質もあり、タウの異常が神経細胞を障害しますが、Aβの蓄積はタウの異常を促進すると考えられています。なお、Aβは、アルツハイマー病が認知機能低下を引き起こす10～20年以上前から脳にたまり始めることが知られています¹⁾。

1) Hampel H, et al.: Mol Psychiatry 2021; 26(10): 5481-5503



治療スケジュール

レケンビは、約1時間かけて点滴する薬です。2週間ごとに通院していただき、投与します。

投与の方法と間隔

点滴



1回 1時間



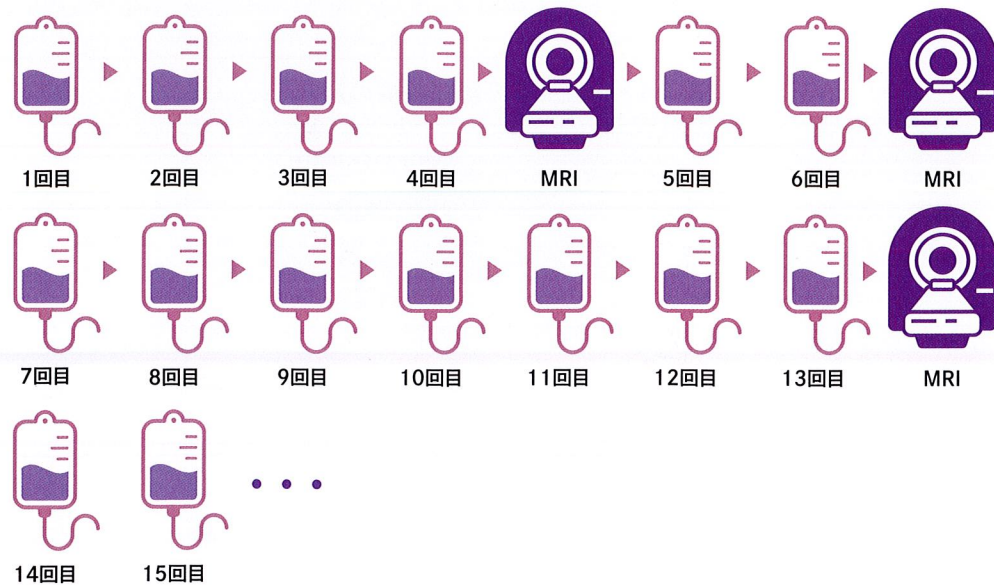
2週間ごと



レケンビを初めて投与する前にはMRI検査が必要です。

また治療開始後においては、5回目の投与前（投与開始後2ヵ月までを目安）、7回目の投与前（投与開始後3ヵ月までを目安）、14回目の投与前（投与開始後6ヵ月までを目安）にはMRI検査を実施します。それ以外においても必要に応じてMRI検査を医師の指示にしたがい、必ず受けるようにしてください。

なお、薬の投与中は6ヵ月ごと、また投与開始後18ヵ月を目安に、医師が症状に基づき薬の効果や病気の進み具合などを確認し、レケンビでの治療の継続または中止を判断します。またそれ以外にも、副作用の発現状況を評価し、医師が治療の中止を判断する場合があります。



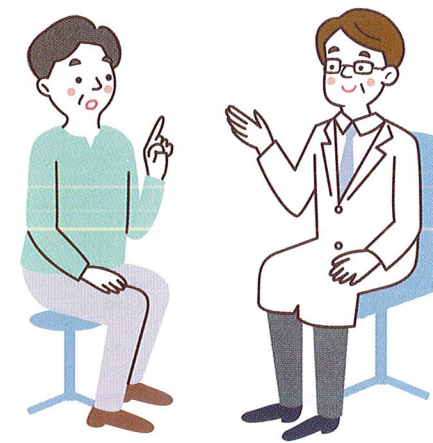
治療を始めるにあたって注意した方がいいことは？

以下のような場合はレケンビの投与ができない場合があります。

- レケンビの成分に対して過敏症^{注)}を起こしたことがある
- 脳のむくみや出血がある
- 妊娠中または妊娠している可能性がある
- 授乳中である

注)「皮ふの広い範囲が赤くなる」、「高熱(38℃以上)」、「のどの痛み」、「全身がだるい」、「食欲が出ない」、「リンパ節がはれる」などがみられ、その症状が持続したり、急激に悪くなったりすることがあります(厚生労働省「重篤副作用疾患別対応マニュアル 薬剤性過敏症候群」平成19年6月)。

※上記の条件に当てはまらない場合でも、複数のリスクがある場合や副作用が起きる可能性が高いと医師が判断した場合には、投与ができないこともあります。



投与後に注意しなければならないことは？

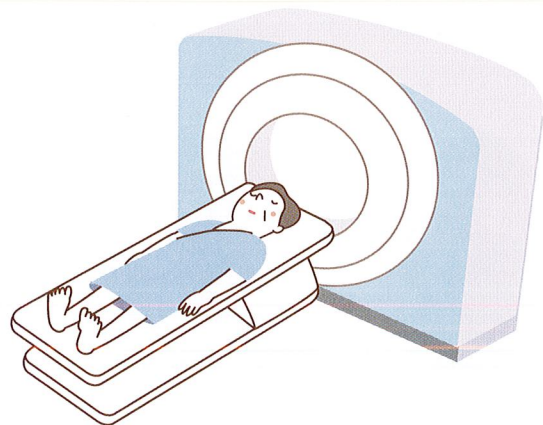
アミロイド関連画像異常 (ARIA) という副作用があらわれることがあります。

アミロイド関連画像異常 (ARIA) について

レケンビのように、 $A\beta$ を減少させる薬を使用すると、アミロイド関連画像異常 (ARIA) という副作用があらわれることがあります。

ARIAは、脳から $A\beta$ が除去されるときに、一時的に血液や血漿 (血液中の水分などの成分) が血管の外に漏れ出すことで起こるといわれています。それにより、脳のむくみや脳の中で出血が起こることがあります。

ARIAの有無はMRI検査で確認することができるので、レケンビの投与を開始した後は、5回目、7回目、14回目の投与前にMRI検査を受けていただきます。それ以降も医師の指示により、定期的にMRI検査を受けるようにしてください。



投与後にどんな症状が出る可能性がありますか？

レケンビを投与した後に、以下の症状があらわれることがあります。

点滴に伴う反応

点滴で薬剤を投与した後に起こる反応で、頭痛、悪寒、発熱、吐き気、嘔吐などの症状があらわれることがあります。

上記の症状があらわれたら、医師・看護師に必ず伝えてください。



アミロイド関連画像異常 (ARIA) ※前頁参照

脳のむくみ、脳の出血、出血した血液がかたまり付着することが報告されています。ARIAが見つかった場合には、追加のMRI検査を行い、重症度によってはレケンビの治療を中断することもあります。

ARIAが起こっても、ほとんどの場合症状はありませんが、まれに頭痛、錯乱、視覚障害、めまい、吐き気、歩行障害などの症状があらわれる場合があります。

このような症状があらわれた場合は、すぐに医師に連絡してください。

これらのほかにも、気になる症状があらわれた場合には、
医師や薬剤師に相談してください。